

八千代市下高野の 富士講資料



蕨 由美

2022.5.15 八千代栗谷遺跡研究会

下高野の富士講関連の石造物



手洗石 明治33年2月26日 (1900)
 「〔丸不二講講紋〕 奉納 仙元大神
 大願成就／当村願主立石傳左工門」



登山記念碑 昭和3年3月吉日 (1928)
 「〔割菱講紋〕 登山記念
 立石榮衛 全茂雄 全光 全仁輔 全良助 全實 全政清 全勇 全起
 小沢倉吉 全登 全節 深山隆 全敏 全理 全浦治 全慶助 全金造
 世代 一 立石徳兵工 全利吉 全石太郎
 二 全藤作 全鉄之助 小沢元治郎
 三 立石良郎 全徳太郎 全 安太郎
 世話人 徳兵工 立石徳太郎 庄左工門 全藤作 所左工門 全元吉」





小御嶽石尊大権現塔 文久2年2月吉日 (1861)
 「小御岳 石尊大権現 大天狗 小天狗 / 女人講中
 當村 立石傳左工門 同○左工門隱居 同○○○○○」



仙元宮石祠 嘉永2・2・13 (1849)

「仙元宮 當邑講中

世八人 立石藤右工門 立石傳左工門」

台石に三猿

下高野の富士講関連資料

No	資料名	形態
1	掛軸「御身抜」（五行身抜）	紙本墨書軸装
2	掛軸「御身抜」（五行身抜）	紙本墨書軸装
3	掛軸「御身抜」（「烏帽子岩」の歌付き）	紙本墨書軸装
4	掛軸「小御岳石尊大権現」（大小天狗画像付）	紙本墨書軸装
5	掛軸「小御岳石尊大権現」（「砂山と・・・」の歌付）	紙本墨書軸装
6	掛軸「木花開耶姫命の図」	紙本採色画軸装
7	「不二行者世代巻」文書（弘化5年2月）	竪紙（2枚巻物状）
8	行名免状「真行真面」（明治33年6月15日）	竪紙
9	「崇判断」写し（大正12年2月3日）	折紙
10	御詠歌写し「追膳（善）御礼」他	竪紙
11	「富士講代々図」	版本
12	「浅間大神並扶桑教祖出現尊影」（明治19年7月）	版本
13	御札「角行尊師之真像」3点	
14	御札「富士山祈祷御璽」3点	
15	護符「オフセギ」	小切紙
16	「人穴御垢」	小袋（砂入り）

御見抜の唱え方

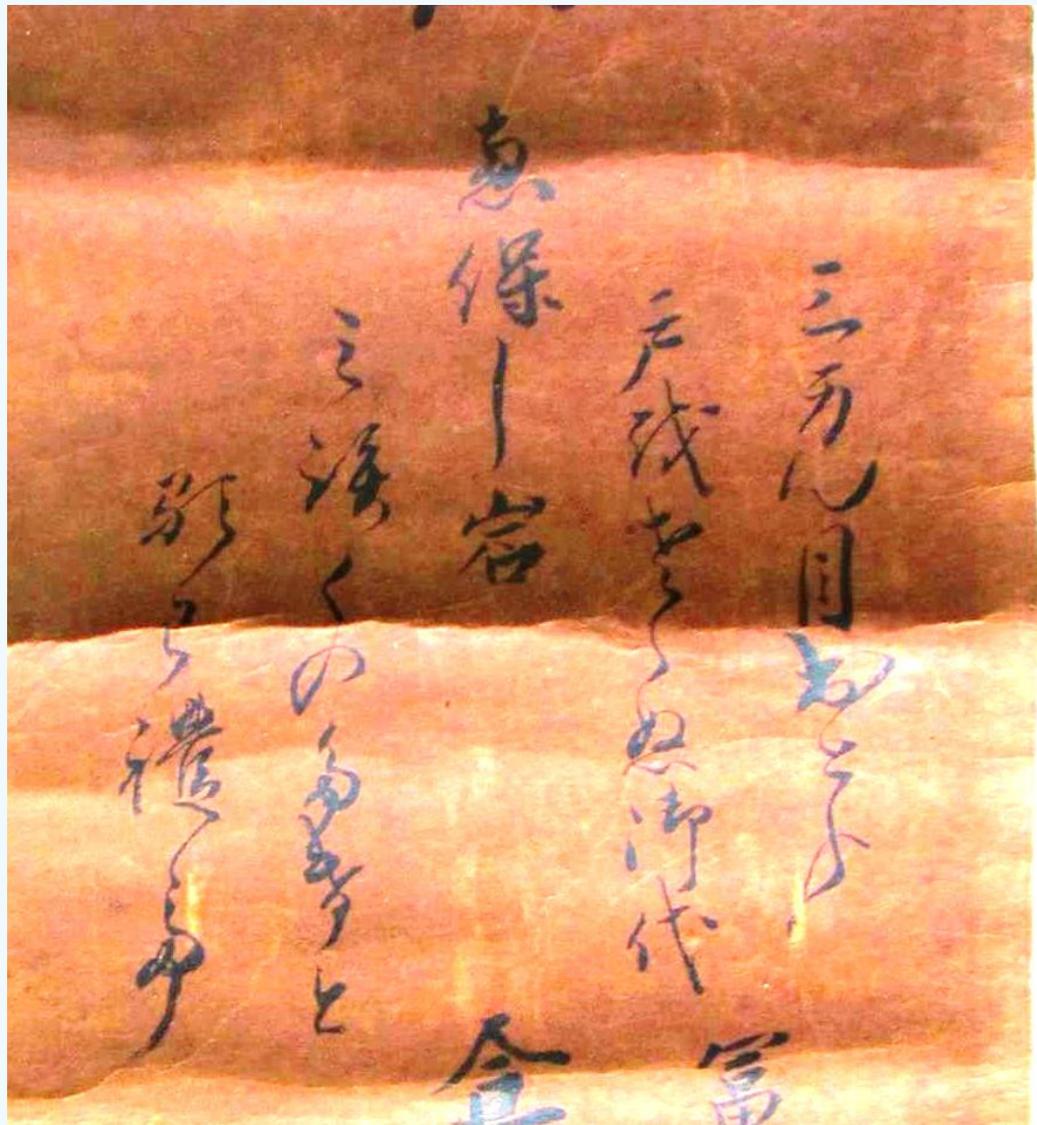
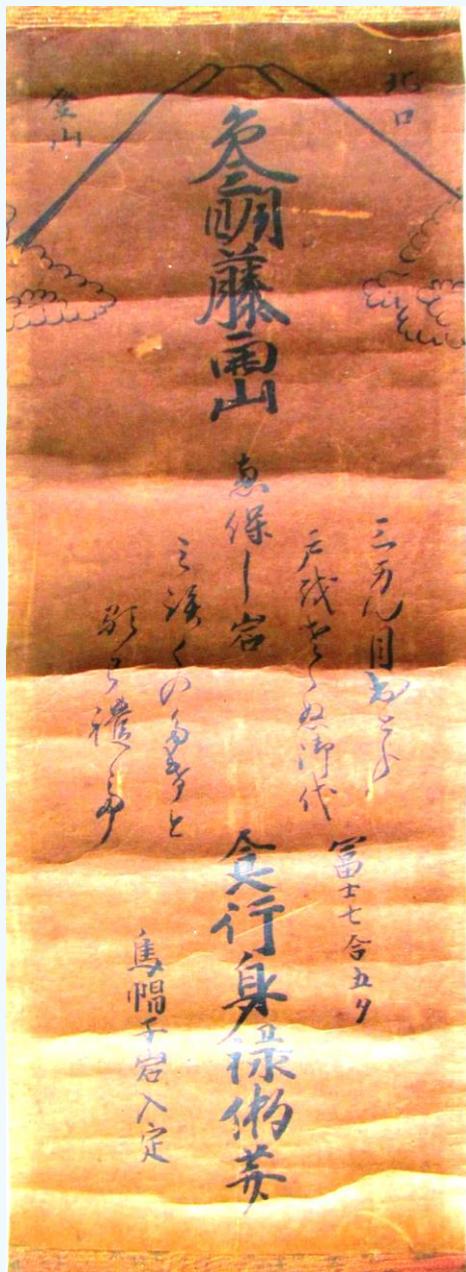
<p>便<small>は</small>は</p> <p>参明<small>さんみ</small> 藤開山<small>とうかいさん</small> 天<small>てん</small> 補<small>ごう</small> 偈<small>くわい</small> 大<small>たい</small> 觀<small>そく</small> 妙<small>み</small> 王<small>み</small> 觀<small>よう</small> 躰<small>お</small> 拾<small>そく</small> 坊<small>たい</small> 光<small>くわい</small> 偈<small>しん</small> 心<small>しん</small></p> <p>南<small>な</small> 無<small>む</small> 仙<small>せん</small> 元<small>げん</small> 大<small>だい</small> 菩<small>ぼ</small> 薩<small>さつ</small> 大<small>たい</small> 我<small>が</small></p> <p>南<small>な</small> 無<small>む</small> 長<small>ちよう</small> 日<small>じつ</small> 月<small>がつ</small> 光<small>こう</small> 仏<small>ぶつ</small> 大<small>たい</small> 我<small>が</small></p> <p>相門<small>そうもん</small> 言<small>げん</small> 心<small>しん</small> 金<small>こん</small> 仁<small>にん</small> 開<small>かい</small> 風<small>ふう</small> 心<small>しん</small> 白<small>しろ</small> 生<small>くわい</small> 我<small>くわい</small> 者<small>しん</small></p>	<p>彌<small>ち</small>ち</p> <p>南<small>な</small> 無<small>む</small> 仙<small>せん</small> 元<small>げん</small> 大<small>だい</small> 菩<small>ぼ</small> 薩<small>さつ</small> 大<small>たい</small> 我<small>が</small></p> <p>南<small>な</small> 無<small>む</small> 長<small>ちよう</small> 日<small>じつ</small> 月<small>がつ</small> 光<small>こう</small> 仏<small>ぶつ</small> 大<small>たい</small> 我<small>が</small></p> <p>相門<small>そうもん</small> 意<small>い</small> 金<small>こん</small> 仁<small>にん</small> 彌<small>ち</small> 心<small>しん</small> 白<small>しろ</small> 生<small>くわい</small> 我<small>くわい</small> 者<small>しん</small></p>
---	---

彌ち 南な 無む 仙せん 元げん 大だい 菩ぼ 薩さつ 大たい 我が

南な 無む 長ちよう 日じつ 月がつ 光こう 仏ぶつ 大たい 我が

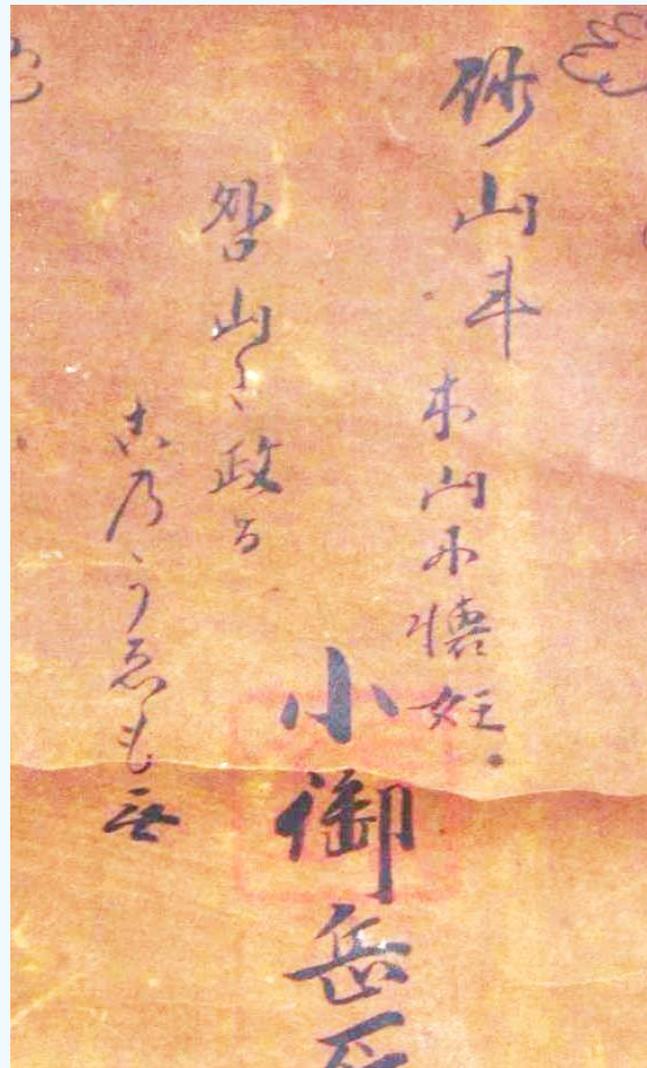
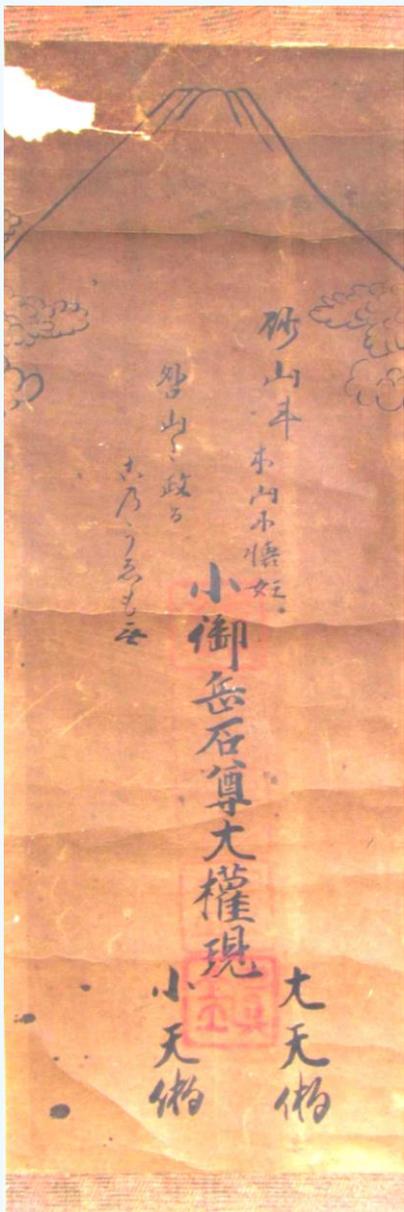
相門そうもん 意い 金こん 仁にん 彌ち 心しん 白しろ 生くわい 我くわい 者しん

「烏帽子岩」の歌の御見抜



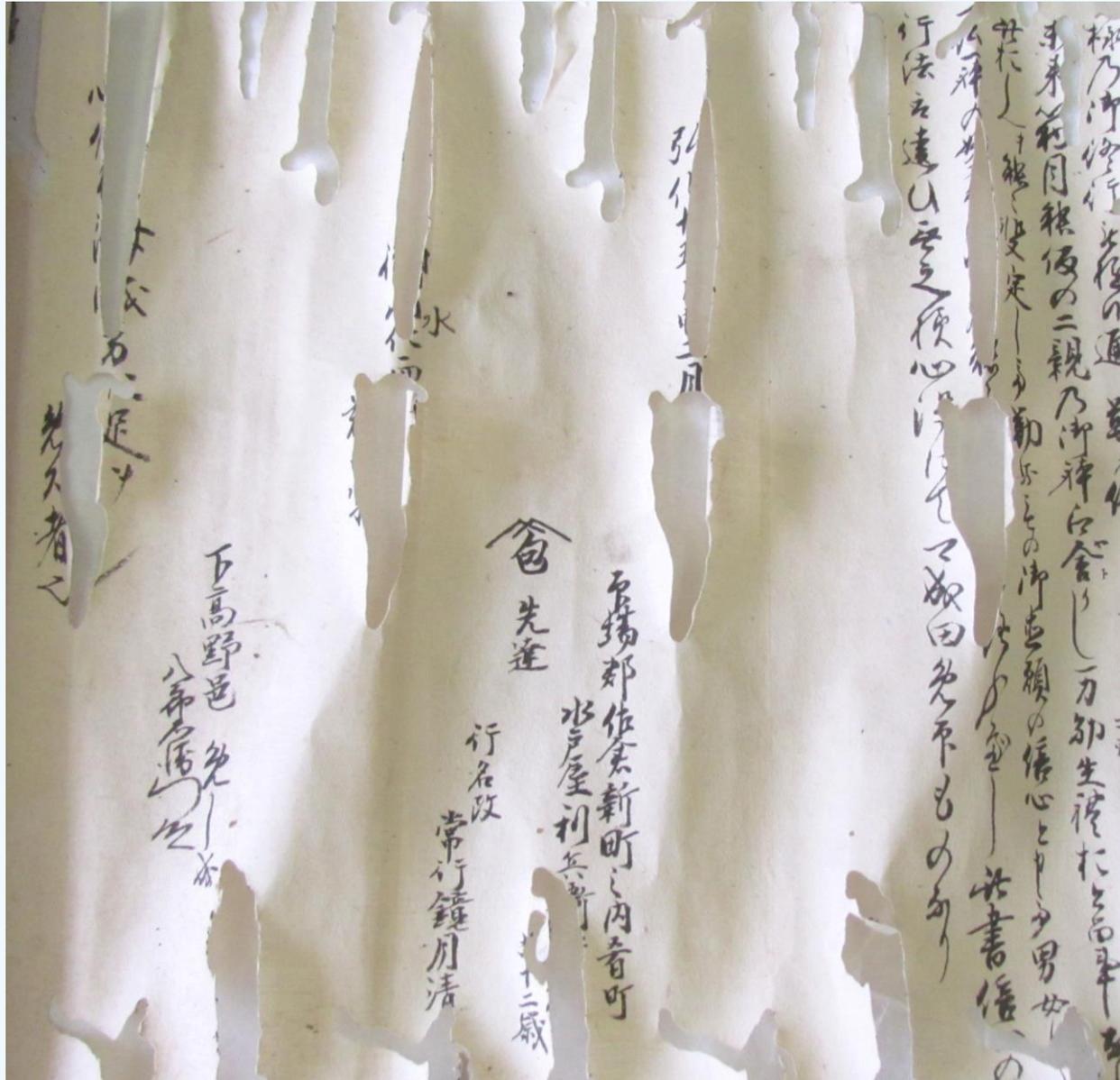
- (中) 急保一岩 (烏帽子) 岩
- (左) みろく (身禄) のたけ (嶽) と / 頭われて
- (右) 三万 (方) めでとふ / 戸をさゝぬ御代 /

掛軸「小御岳石尊大権現」
 (「砂山と・・・」の歌付)



「砂山と
 木山に懐妊（はらむ）
 小御嶽（は）
 外山（とやま）に政（まさ）る
 このうゑも無」

「不二行者世代巻」 文書二枚目の末尾



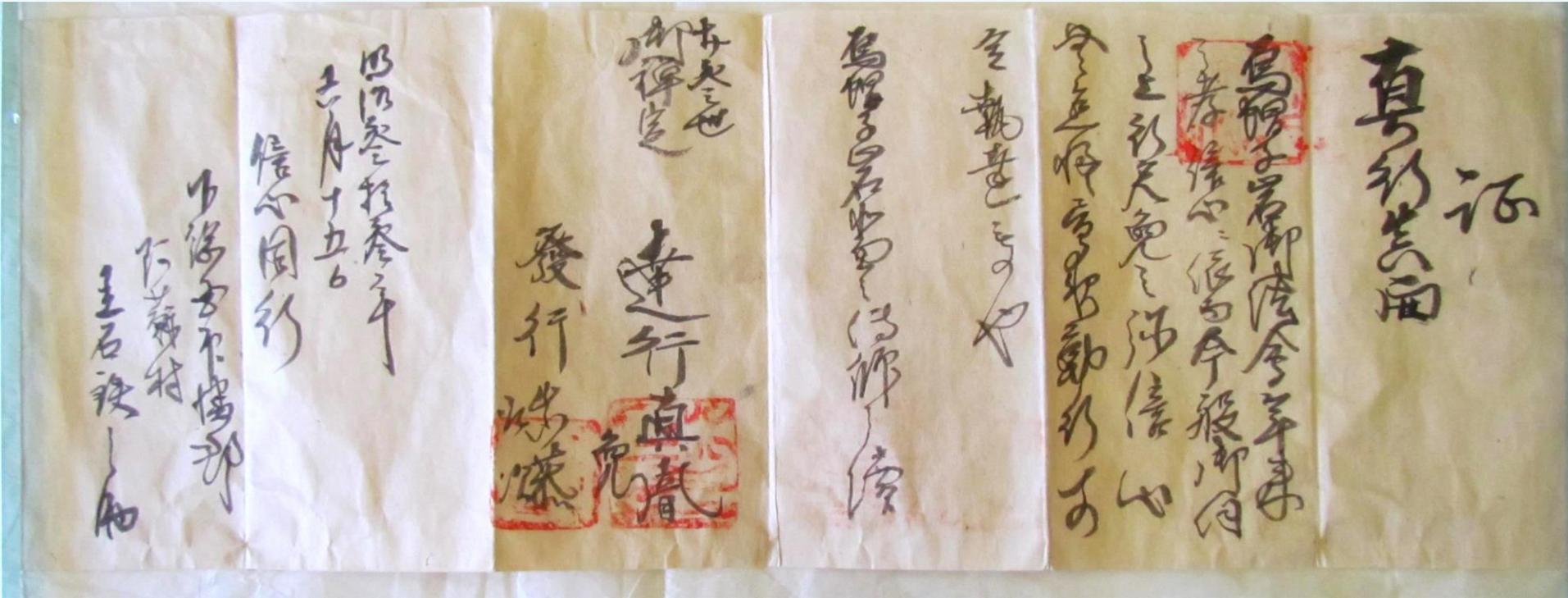
「不二行者世代巻」文書
「弘化五*年（1848）戊申二月」に、
「佐倉新町内肴町 水戸屋利兵衛」
こと「山包講」の「先達」の「常行
鏡月清口」より、「下高野邑 八郎
右衛門殿」あてに「免（ゆる）しの
巻」として下された文書。
（*は推定）

縦紙2枚に流麗な字体で書かれた長
文で、富士山の神仏の格、聖徳太子
の開山、「書行藤佛」（＝角行）の
事績（内八湖外八湖四海四嶋での荒
行、人穴での角材上の爪立行、「御
身抜」の啓示）と、「七世食行身
祿」の事績（御身抜に「参」の一
字を加えて「参明藤開山」と改め、
荒行の後、享保十五年入滅、後に
「菩薩」となる）とその教え、この
文書の取り扱い方が記されている。

山包講は、江戸の修山禅行（包市郎
兵衛）が天明5年（1785年）頃にお
こした講で、禅行の弟子の市原市君
塚の正行真鏡から、文政年間頃、安
房をはじめ千葉県全域に広まったと
みられる。



行名免状「真行真面」(明治33年6月15日)



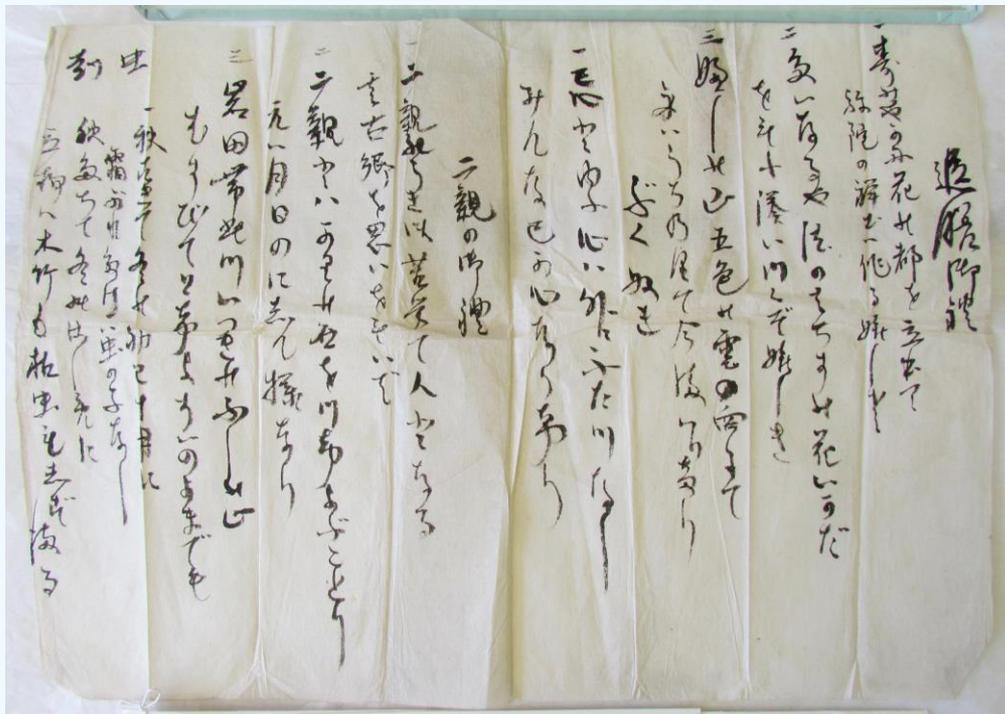
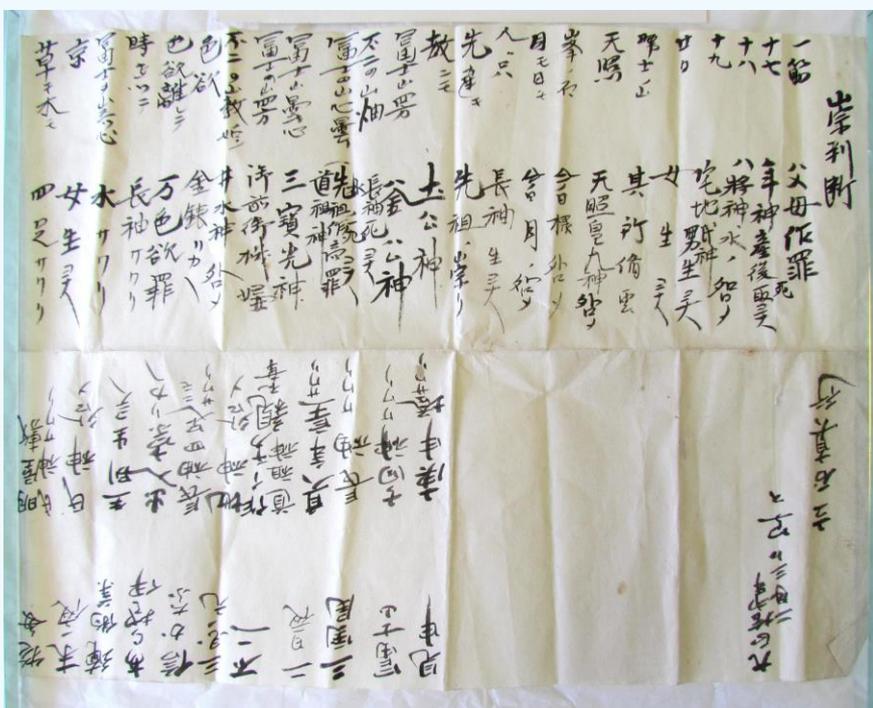
明治33年、達行真胤（割菱講の第24世）より
立石鉄之助あてに発せられた行名「真行真面」の免状

「証
 真行真面
 烏帽子岩御法会年来ノ之孝信心ニ依而今般御伺ノ之上行名免之弥信心ノ無怠慢昼夜
 勤行可ノ令執達もの也
 烏帽子岩北面の伝師之続
 廿参世ノ御禅定ノ達行真胤ノ免
 発行真恭ノ取次
 明治参拾参年ノ六月十五日ノ信心同行
 下総国印旛郡ノ阿蘇村ノ立石鉄之助」

手書きの写し

「崇判断」写しの折紙

「崇判断」の内容として「一筋 父母作罪
／十七 年神産後死霊」ほか33項目を列記し、
末尾に「大正拾貳年二月三日写ス／立石真行」と記されている。
講の行者として、村民の心配事の相談にも乗っていたのであろう。



「追膳（善）御礼」、「ぶくぬき」（服喪明け）、「二親の御礼」「虫封」の歌の写し

「追膳（善）御礼／一すみやかに花の都を立出て／弥陀の禅士ハ作る嬉しき／二たいなるや法のはちすの花いかだ／をもふ湊ハつくぞ嬉しき／三ふしの山五色の雲の向にて／身ハうちのりて今まいりけり
ぶくぬき／一忌とゆふ心ハ外ニふたつなし／みんな己か心なりけり
二親の御礼／一二親うれい苦勞て人となる／其古郷を思いをもハば／二二親とハかりの名をつけよぶことり／元八月日のにしん様なり／三岩田帯此ついつきのふしの山／むすびてとけよすいのよまでも
虫封／一秋すきて冬の初わ十月に／霜がれたけハ虫の子なし／一秋たちて冬のはしめに／立物ハ木竹も枯虫もしずまる」

版本「富士講代々図」



「富士講代々図」は、高祖角行と二世日行・三世旺（がん）心・四世月旺・五世僧什（月行）、元祖身祿の尊像の絵で、天保3年（1833）の身祿百回忌に吉田の御師から印行された月行派の講祖代々の図と全く同じ絵である。



版本「浅間大神並扶桑教祖出現尊影」

「浅間大神並扶桑教祖出現尊影」は、日月、富士山の図中央に「木花開耶姫命」神像、「明藤開山 藤原角行」、「人穴」と角材上爪立行中の角行尊像、中段に角行の事績、下段に「正統二世日旺師」から「六世光清師」までと、「別立五世月行師」「別立六世身禄参明藤開山食行身禄尊師」の系図と事績が書かれている。

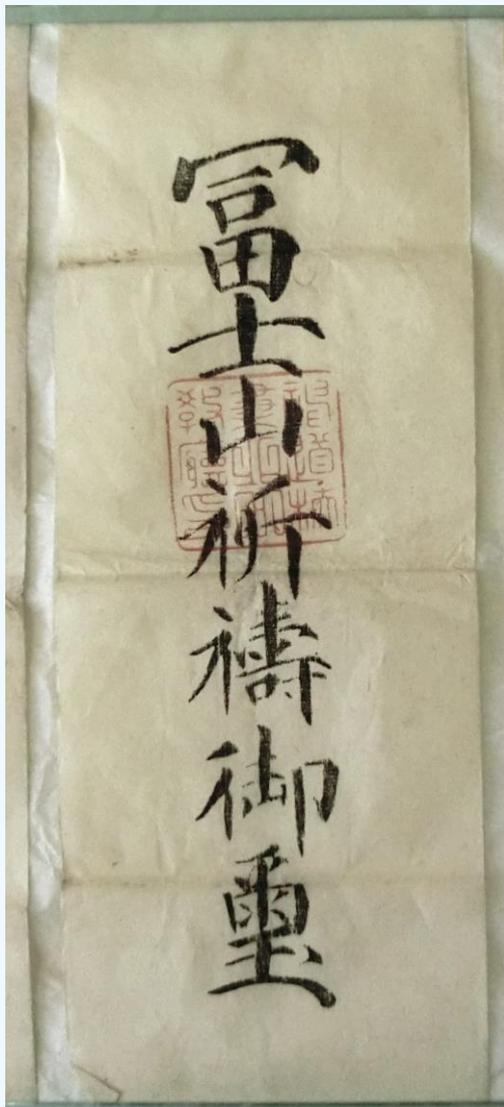
江戸後期に江戸八百八講といわれるほどに普及した富士講は、明治元年の廃仏毀釈、明治4年の政府による御師制度の廃止により、明治8年に富士山の仏教的地名が変更され、富士講は教派神道の教会組織に再編成される。北口浅間神社が中心になって組織されたのが、扶桑教会である。

本資料は、欄外に「明治十九年七月十八日出板御届」とあり、静岡県権訓導の許可を得て、扶桑教会より出版されたものである。



御札・オフセギなど御利益の品々

御札「富士山祈禱御璽」



御札「角行尊師之真像」



呪術用護符「オフセギ」



「人穴御垢」小袋

下高野の石造物・文書資料による富士講のあゆみ

弘化5年2月(1848)「不二行者世代巻」**山包講** 立石八郎右衛門

嘉永2年2月(1849) 仙元宮石祠 立石籐右衛門・立石傳左エ門

文久2年2月(1861) 小御嶽石尊大権現塔 立石傳左エ門など

明治33年2月(1900)手洗石 **丸不二講** 立石傳左エ門

明治33年6月(1900)行名(「真行真面」)免状 **割菱講** 立石鉄之助

昭和3年3月(1928)登山記念碑 **割菱講** 立石徳兵エ・立石鉄之助他38名

江戸後期から近代の下高野では、立石傳左エ門が、富士塚に見立てた裏山の富士講祭祀石造物の創設を行い、また立石八郎右衛門は山包講、同家の鉄之助は割菱講の行者として先達から行名が免されています。

立石鉄之助は、富士登拝のほか、富士講行者としてムラの人々に吉凶の占いや病気防ぎなどの活動を行っていたことがわかります。

山包講＝市原市五井(修山禪行)⇒千葉県全域

丸不二講＝東京湾岸の江戸川・葛飾区～浦安・市川・習志野・千葉市～印旛郡北部

割菱講＝市川市行徳～船橋市～八千代市米本(弘化4年1847)～佐倉市などへ